3 月 6 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　1：　12 – 15

「誘惑を受けられた」

2022 年もレント(受難節、四旬節)を迎えました。レントのシンボルカラーである紫色は「待つ」色と言われます。「復活前節」という呼び方からも、イエスの十字架と復活を「待ち望む」期節と言えるでしょう。けれども、前週の説教を引き合いに出すまでもなく、私たちは「待つ」ことが本当に苦手です。苦難に遭遇するとすぐにインスタントな救いを求めてしまいます。その行いが、救いから自分で自分を遠ざけてしまう行為であることも理解できずに、私たちはつい、インスタントな祈りを続けてしまうのです。

マルコは、イエスが荒れ野に赴かれ、「サタンから誘惑を受けられた」(マルコによる福音書 1:13)とのみ記しています。いわゆる「3 つの誘惑」(石をパンに変えること、高いところから飛び降りても守られること、世界の支配権を与えられること)を記しているマタイ、ルカとは異なります。

確かに、3 つの誘惑が記してあることは、読者である私たちにとって大変わかりやすいものです。いずれも「自分さえ良ければ」という誘惑です。

しかし、誘惑はそれだけではないはずです。「誰かのために」という誘惑もあります。

イエスは助けの手を伸ばすことができる方です。「御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです」(ヘブライ人への手紙 2:18)。この言葉は真実です。ただ、そうであるが故に、そこに胡座を掻く人間が多いのも確かです。インスタントに「今すぐ解決してください」と願う者のなんと多いことでしょう。そして、イエスの力をもってすれば、簡単に解決できることが多いことも確かです。

もちろん、インスタントな救いはインスタントな信仰しか生みません(「ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち……すぐ芽を出した。しかし、……根がないために枯れてしまった。」マルコによる福音書 4:5-6)。だから、イエスにとって、「できるけれど、やらない」という戦いがあったことでしょう。

なぜ「やらない」ことを選択されるのでしょうか。それは真の救いはそのようなものではないからです。イスラエルが、そして全ての民が神の前に悔い改め、真に神の民として、神と共に歩むこと。これが真の救いであり、神がイエスを通して実現しようとされる新しい契約に他なりません(「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。」エレミヤ書 31:31)。そして、イエスはその時が来たことを告げ知らせるために、今、ここにおられるのです(「神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた。」マルコによる福音書 1:15)。

では、私たちの小さな願いは叶わないのでしょうか。いいえ、叶わないということはないでしょう。ただし、インスタントに、自分の思い通りに叶うことはほとんどありません。

神は共に歩む者を常に守り、導いてくださる方です(「神はあなたを救い出してくださる……神は羽をもってあなたを覆い／翼の下にかばってくださる。」詩編 91:3-4)。その助けの中には、私たちの小さな願いも含まれていると信じます。神は必ず私たちを助け出してくださると。

だからこそ、ついインスタントな願いをしてしまうという誘惑から私たちも逃れたいのです。「できるけれど、やらない」。誘惑から救い出してくださいと祈りつつ、真の救いの道を歩みましょう。そして、イースターまでの 6 週間、イエスの十字架を、復活をしっかりと待ち望みましょう。